

平成31年1月8日(火)

### 始業集会挨拶

平成31年の正月、皆さん新年あけましておめでとうございます。

時に、この一年を前にして、年末からつらつらと考える機会あるごとに、もう一度私たちは原点に戻って行動を起こすべきだという結論から、中国の思想家孔子が述べたものを弟子たちがまとめたものである「論語」を紐解き、その論語の第1章「学而第一」の中の「学びて時に之を習ふ」を皆さんへ紹介することにしました。

なぜなら、私たち高校教育にかかわるものとして、原点とは、「学び」であると考えたからです。物事の不思議を発見し、繰り返し何度も考察し、情報を集めて、いったい何が正しいのかという課題意識を持続させ、真理を探求し、学び続けることが我々の原点です。それが「学問」への道をしっかりとさせていくものであることは疑いようありません。

子曰。「学而時習之。不亦説乎。有朋自遠方来。不亦楽乎。人不知而不愠。不亦君子乎。」

子曰く、「学びて時に之を習ふ。亦説(よろこ)ばしからずや。朋有り、遠方より来たる。亦楽しからずや。人知らずして愠(うら)みず、亦君子ならずや。」と。

先生(孔子)はおっしゃいました。習ったことを機会があるごとに復習し身につけていくことは、なんと喜ばしいことでしょうか。友人が遠方からわざわざ私のために訪ねてきてくれることは、なんと嬉しいことでしょうか。他人が自分を認めてくれないからといって不平不満を言うことはありません。なんと徳のある人ではないでしょうか。

この文章から、学びそのものと学ぶ者としての同志へのリスペクトと、世間が認めようと認めなかりと、学び続けることへの信念が垣間見られます。

磐城高校生は、「大学への数学」という雑誌の問題に挑戦し高得点者一覧に名前を載せたり、研究社の英和中辞典をすべて読み暗記したり、岩波古典体系そのものを100巻読み続けたり、全世界の国々の首都をすべて言えるようになったり、中公文庫の世界の歴史30巻を読破したり、星座の名前と恒星や星雲の名前をすべて言い当てたり、フランス語やイタリア語を自学自習していたり、枚挙にいとまがないほどのその道の達人が跋扈していた学校であり、今もそうなのだと思います。

もう一度、原点に立ち返って、「学び」への意識を高め、この一年を充実させましょう。

